

凡例

本書では、海辺で拾える一般的な貝類150種を取り上げて紹介した。



1 種名・学名・科名

学名・分類体系は、おおむね奥谷ほか(2000)に従った。また、別名がある場合は、解説文の中に書き入れた。

2 殻長

一般的なサイズを記した。

3 標本写真

摩耗の進んだ個体を左、右方向には新鮮な個体を掲載した。標本は、すべて相模湾沿岸の三浦半島に打ち上がったもの。絵合わせの助けとなるよう、原寸大の写真(1)も掲載した。

4 解説

特徴(特)、分布(分)、生息環境(生)を簡潔にまとめた。

貝の保管

海辺で拾った貝は、塩分を抜くために真水で洗って干します。乾いたらチャック付のビニール袋にデータ(種名、採集場所、採集日、採集者、気づいたこと等)とともに入れておきましょう。

貝拾いのための持ち物リスト

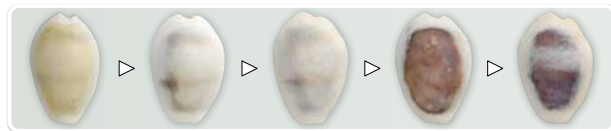
- | | | |
|---------|----------|------------------|
| 1 地図 | 4 カメラ | 7 容器(壊れやすい貝を入れる) |
| 2 貝類の図鑑 | 5 ポリ袋 | 8 手袋 |
| 3 メモ帳 | 6 小型のバケツ | 9 ピンセット |

注意すること

海岸には棘のある魚やクラゲなども打ち上がるので、素手では絶対に触れないこと。また、注射針やガラスの破片などにも要注意です。台風の際は控え、冬は防寒、夏は日差しをよける服装や飲料水を用意して行きましょう。

拾える貝の質

海岸に打ち上がる貝は、穴のあいたものや破片、摩耗して色彩がなくなったものなど、本来の容姿とは異なっています。例えば、キイロダカラは、摩耗が進むと黄色がだんだん紫色に変わります。タカラガイ類の殻には色層があり、摩耗の具合によって、別の色が出るためです。



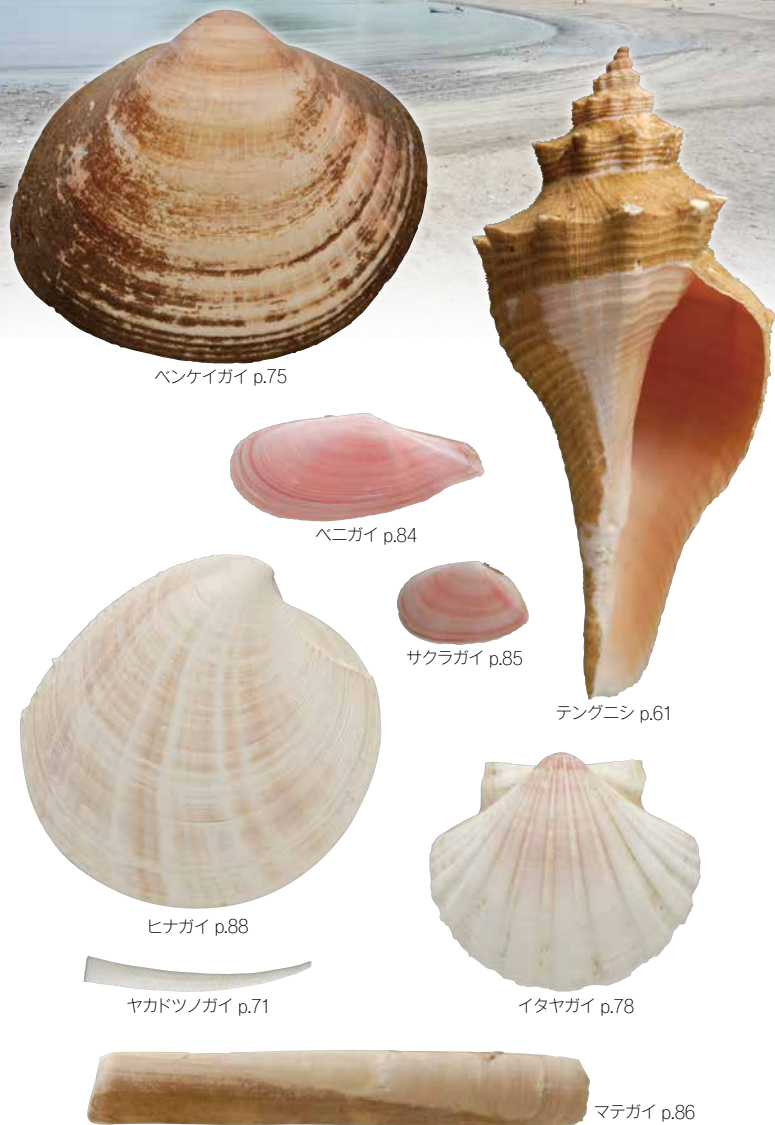
キイロダカラ

用語の解説

- 外套膜**(がいとうまく): 軟体動物の体の表面を覆う膜のこと。貝類は外套膜の表面や縁から石灰分を分泌し、貝殻を形成する。
- 殻皮**(かくひ): 貝殻の外側を覆っているキチン質の膜。薄い皮状のものからブラシ状に発達したのものまである。
- 帰索性**(きそうせい): 動物が巣などから離れても再び同じ場所に戻る性質。帰家性ともいう。
- 地先**(じさき): 本書では、貝の打ち上がった海岸周辺の海域や沖合を指す。
- 歯舌**(しぜつ): 二枚貝を除く軟体動物の口の部分にあり、リボン状の膜の上に小歯が並ぶキチン質の器官。
- 真珠光沢**(しんじゅこうたく): 真珠のような光沢のこと。
- 真珠層**(しんじゅそう): 貝殻の内面にある真珠光沢をもつ層。
- 成貝**(せいがい): 成体になった貝。幼貝に比べて殻がしっかりし、種の特徴がはっきり出る。
- 石灰藻**(せっかいそう): 細胞壁に石灰質が沈着している藻類の相称。サンゴモ類などがある。
- 足糸**(そくし): アコヤガイなどの二枚貝が岩や砂泥に付着するために出す糸状の物質。
- 動物体**(どうぶつたい): 貝類の場合は貝殻を除く軟体部のこと。
- 卵のう**(らんのおう): 卵を包んでいる袋状のもの。海産の巻貝で多く見られる。
- 老成**(ろうせい): 年数を経て十分に成長し、熟成すること。
- 幼貝**(ようがい): 成体になる前の貝。殻が薄く、殻口も形成されていない。
- きれいな個体**: 死んでしばらくたってはいても摩耗が少なく、形態や色彩がよく残っている貝のこと。
- 新鮮な個体**: 死んだばかりで形態や色が生きていたときとさほど変わらない貝のこと。

砂浜で拾える貝

地域差はありますが、通常、砂浜には巻貝より二枚貝のサクラガイやチョウセンハマグリなどの打ち上げが目立ちます。これは、砂浜には砂中に潜って生活する二枚貝が多いからです。巻貝ではツメタガイやホタルガイ、キサゴなど岩礁にはいない貝を拾うことができます。丸い穴の開いた二枚貝を拾った経験をお持ちの方も多いでしょう。これはツメタガイによる作業です(p.49)。ここでは砂浜で拾える主な貝を紹介します。



サザエ *Turbo cornutus* Lightfoot, 1786

リュウテンサザエ科 | 殻長: 8~12 cm



特 殻に棘のあるものから棘を欠くものまであり、形態は変異に富む。通常、棘は体層に2列あるが1列、3列のものもある。食用にされるため、海岸で拾うものは地先産とは限らず、捨てられたものも混ざっている。壊れて磨耗しても殻の軸は残る。棘や蓋もよく打ち上がる。

分 北海道南部~九州

生 潮間帯~水深50mの岩礁

×1

スガイ *Lunella coronata coreensis* (Récluz, 1853)

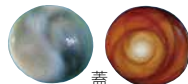
リュウテンサザエ科 | 殻長: 2~3 cm



特 殻は丸みが強く、全体がほぼ平滑なものから大小の顆粒や肩の部分に疣があるものなど変異がある。殻色は緑褐色や黄褐色などがある。カニに捕食され、壊れた殻も多い。蓋は石灰質で丸く、多数、打ち上がる海岸もある。

分 北海道南部~九州・朝鮮

生 潮間帯の岩礁、転石、砂礫地



蓋



疣のある個体

×1

ウラウスガイ *Astralium haematragum* (Menke, 1829)

リュウテンサザエ科 | 殻長: 3~4 cm



特 殻は円錐形で周縁に歯車状の突起がある。通常、生きているときは殻に石海藻などの付着物が多くついている。殻底の軸唇に添った部分と蓋の周縁は濃い紫色をしている。殻は摩耗が進むと白くなる。岩浜に打ち上がる。

分 男鹿半島以南

生 潮間帯~水深10mの岩礁

×1



ベニガイ *Pharaonella sieboldii* (Deshayes, 1855)

ニッコウガイ科 | 殻長: 5~6 cm



特 殻は薄質で前後に長く、前端は丸く後端は口ばし状に伸びる。若い個体ほど光沢がある。殻色は表面、内面ともに淡紅色。砂浜に打ち上がり、かつては台風の後、生きた個体も見られたが、近年、都市近郊の海岸では激減した。

分 北海道南部~九州

生 潮下帯~水深20mの砂底

サギガイ *Macoma sector* Oyama, 1950

ニッコウガイ科 | 殻長: 3~5 cm



特 殻は楕円形、膨らみは弱く薄質。殻表は平滑、成長脈はあるが、小形の個体ほど光沢がある。殻は白色で、薄い黄褐色の殻皮をかぶるが、大半は擦れて殻の縁に残る程度。砂浜に打ち上がり、破損がなく両殻そろった個体も多い。

分 サハリン~九州、台湾、中国

生 水深5~20mの砂底、砂泥底

サクラガイ *Nitidotellina hokkaidoensis* (Habe, 1961)

ニッコウガイ科 | 殻長: 1.5~2 cm



特 殻は薄く、桃色で光沢がある。砂浜に打ち上がるが、ツメタガイ (p.49) に捕食されて殻に穴の開いた個体が多い(写真: 右下。下の2種も同様)。

分 北海道南部~九州

生 潮下帯~水深10mの砂底

カバザクラ *Nitidotellina iridella* (Martens, 1865)

ニッコウガイ科 | 殻長: 1.5~2 cm



特 サクラガイより白線がはっきりしている。^{赤線} 稜色 (赤色みを帯びた黄色) の個体もあるのでこの名がある(写真: 右上)。砂浜に打ち上がる。

分 房総半島以南~台湾

生 潮下帯~水深10mの砂底

モモノハナガイ *Moerella jedoensis* (Lischke, 1872)

ニッコウガイ科 | 殻長: 1~1.5 cm



特 殻は亜三角形。上の2種より小形で赤色みが強い。学名のjedoensisは江戸を意味し、エドザクラの別名がある。砂浜に打ち上がる。

分 房総半島~九州

生 潮間帯の砂底